

## 1 閣議決定による縁故疎開（注1）

昭和19年3月、閣議決定により、国が縁故疎開を進める。

やがて、空襲を逃れて子供達が三々五々、各組に編入（注2）されてきた。

昭和20年、当時私は小学3年生で、担任は本多綾先生（現在は樋口）だった。

先生の教壇近くの前の席が私の席であり、隣の席には東京弁の細長い顔の疎開してきた子がいた。その後ろの席には丸顔のもう一人の疎開の子がいた。

ある日、丸顔の子の親が学校に訪ねてきた。

生徒玄関から入って運動場の入り口のところで、その子と話をしていた。

この時、細長い顔の子が、この光景を見ていて、運動場の中ほどの所で泣いていた。自分も親に会いたくなかったのだろうか。

戦争は、理不尽（注3）以外の何ものでもない。国という大きな流れの中で、1個人の意思などは泡粒のように訳も無く漂うしかなかっただろう。

今、あの時の2人はどこでどうしているだろうか。元気でいてくれればいいが・・・。

戦争中の小学校への登校は、各町内ごとに2列に並び、1番前に班長がいて後ろに1年生から6年生までが並んでの集団登校だった。

（注1）疎開

◎一般疎開

第二次大戦中、軍事施設、工場、鉄道、重要道路の周辺や密集地域の建物が取り壊され、住民も異動させられました。

閣議決定 昭和18年12月

◎縁故疎開

地方の親戚や縁故者を頼っての疎開。

閣議決定 昭和19年3月

◎学童集団疎開

国民学校初等科3～6年生の学童を区が決めた地方の市町村に学校が疎開、原則として縁故疎開を優先し、縁故先の無い者に対して、学校単位の集団疎開をした。

閣議決定 昭和19年6月

第一陣出発 昭和19年8月

◎縁故疎開（小須戸国民学校昭和18年度入学の場合）

子供達の人数は約120名。

その上、判明した疎開児童の人数が26名。

当時の本多綾先生は40名位と記憶している。

その為に、ひとクラスが80名位にまでふくれ上がった。

◎集団疎開

深川の白川国民学校より3年生から6年生合わせて、150余人の学童が小須戸町の3か所に分散させられ、集団疎開という形でやってきました。

6年生47人は、6か月後の2月25日に中等学校進学の為、一足先に帰京し、3月10日の東京大空襲に遭遇しました。

出典：戦乱に翻弄された子供達より

（注2）編入

団体や組織などにあとから組み入れること。

（注3）理不尽

物事の筋道を通らないこと。道理にあわないこと。

学校の運動場の前に着くと、上級生が手に棒のようなものを持って立っていた。班長がその前で挨拶をする。

「東部分団第2班ただいま到着」という言葉だったと思う。それから続けて班長は「山本精神を継ぎ・・・、ハイ！」と言う。

それを合図に皆は「山本精神を継ぎ、アツツの闘魂（注4）にんえん」と唱和（注5）してから玄関に入っていくのが日課（注6）であった。

2年生の3学期になった時の学校からの帰りの道のこと。3年生になると、班長が回ってくるので、今から登校の時の班長の練習をしようということになった。

当時、蔵小路には小さな橋があった。その橋の上で、いつも一緒に学校に通っていた相馬久徳君、藤井義雄君、竹石健吾君と、東京から縁故疎開をしてきていた比企一隆君も一緒に「山本精神を継ぎ、ハイ！」と順番に声を出して練習をした。

まだ幼い2年生の頃の、私の脳裏に残る登下校の風景である。

（藤井義雄君は平成15年7月に、竹石健吾君も平成17年7月に亡くなった。鎮魂（注7）・・・合唱。）

そして、終戦。

物の何も無い時代であった。そして何よりも食べ物の無い時代であった。何もかもひもじかったけれど、今にして思えば耐えることしかなかったあの頃が、少しくらいの辛さにもひるま

（注4）闘魂  
たたかい抜こうとする激しい意気込み。闘争精神。

（注5）唱和  
一方が唱え、他方がこれに合わせて唱えること。

（注6）日課  
毎日きまってる物事。

（注7）鎮魂  
死者の魂をなくさめ、しずめること。

ない、忍耐力<sup>にんたいりよく</sup>を身にしみ込ませてくれたように思う。

遊びも、おもちゃなどがあるわけではなく、何でも自分達で工夫<sup>くふう</sup>して、暗くなるまで自由に遊んでいた。

世の中も、人の気持ちがゆったりと動いていたように思う。

柿の1つ、トマトの1個、キュウリの1本を子供達が取って、食べても許してくれることのある時代でもあった。

歳<sup>とし</sup>のせいか、そんな話をよくするようになった。

ある日、信濃川で何人かと泳いだ帰りに喉<sup>のど</sup>がかわ<sup>かわ</sup>いたので、西瓜畑<sup>すいか</sup>から1個失敬<sup>しっけい</sup>（注8）して食べた。

全部を食べきれずにそこに残したまま、帰ろうとした時、その畑の持ち主の親父さんに見つかり、こっぴどく叱<sup>しか</sup>られた。

「お前ら、これ全部食ってから行け。残すんじゃないねえ。もったいねえことをして」と親父さんから言われたが、当時の価値観のおおらかさに触<sup>ふ</sup>れ、今でも気持ちがあたたかくなる。みんな余裕<sup>ゆず</sup>のない暮らしの中でも譲り合ったり、助け合ったりと寛容<sup>かんよう</sup>（注9）な心があった。

平成17年、小学校時代の同年会があった。疎開<sup>そかい</sup>してきていた人達も何人か参加していた。

その時のつきぬ話の中で、偶然にも丸顔の男の子が小柳善博君で、現在は東京の墨田区に住んでおられるとのこと、そして、細長い顔の男

（注8）失敬  
他人の物を許しを得ないで持ち去ること。

（注9）寛容  
心が広く、他人をきびしくとがめだてしないこと。

の子は、和田讓君だということがわかった。

あの時から60年あまりがたって名前が判明するという嬉<sup>うれ</sup>しくも不思議な思いにかられた1日であった。

和田君は、現在アメリカに住んで37年になるといふ。時代の流れを感じさせられると同時に、過ぎし少年の頃の笑顔に戻れたひとときであった。

ひたすら我慢<sup>がまん</sup>せざるを得なかった、あの時代の理不尽<sup>りふじん</sup>さにも押しつぶされることもなく、この年までどうにか曲がらずに歩いてこられた。

全てのこと。全ての者へ感謝の念でいっぱいである。

## 2 「ギブミーチョコ」

昭和20年8月15日、突然戦争が終わった。

それから何カ月か経ったある日のこと。子ども同士で道路上で遊んでいた時のことだった。

遠くの方からジープと思われる物がこちらの方へ向かって進んでくるのが見えた。

一緒に遊んでいた中の誰かが叫んだ。「わあ、進駐軍<sup>しんちゅうぐん</sup>（注10）が来たぞ、早くみんな、隠れろ！」。

私達は、慌ててものかげに小さくなって座り込んだ。

初めて見る進駐軍<sup>しんちゅうぐん</sup>であり、ジープであり、アメリカ人であった。少し怖くもあり、驚<sup>おどろ</sup>きでもあった。

ある時、2歳上の近所のガキ大将が、私の家

（注10）進駐軍  
第二次大戦後、日本に進駐した  
連合国の軍隊。

の近所の軒下<sup>のきした っ</sup>に吊るしてあった、玉ねぎを持って  
てくるようにと言った。私は、親の目を盗んで、  
何個かの玉ねぎをコッソリと持ち出した。5、  
6人の仲間で、その玉ねぎを3キロ先の矢代田  
駅までの砂利道<sup>じゃりみち</sup>を歩いて持って行った。

子供達の中には、軍のお下がりの軍服<sup>ぐんぷく</sup>を着て  
いるものもいた。大人用の軍服<sup>ぐんぷく</sup>が配給<sup>はいきゅう</sup>

(注11)になり、それを子供の体型<sup>たいけい</sup>に合わせて、  
上げをして着るのである。それも抽選<sup>ちゅうせん</sup>で当た  
らなければ、手に入らないという時代であった。

子どもの足で3キロは大変だったが、先に楽  
しみがあることで、それほど苦にならなかった。

矢代田駅の2番ホーム（新潟方面に行く下り  
のホーム）には、弾薬の入っていると思われる  
箱がたくさん積んであり、側には進駐軍<sup>しんちゅうぐん</sup>の兵  
士が何人もいた。

そのホームに勝手に入り、アメリカ兵に近づ  
いていき、「ギブミーチョコ。ギブミーガム。」  
と言い、玉ねぎを差し出すと、その交換<sup>こうかん</sup>に私の  
手の中には見たこともないお菓子<sup>かし</sup>があった。

甘い物など、全くといっていいほど口にする  
ことのない生活の中で、そのアメやガムやチョコ  
レートの、何と甘くおいしかったことか。今  
になってもあの味も、あの時の光景も忘れられ  
ない。

戦争中は「鬼畜米英<sup>きちくべいえい</sup>、欲しがりません、勝つ  
までは」といつも言わされていたが、子供は食  
べる物の前では正直<sup>しょうじき</sup>であった。他の同年代や  
目上の人の中にも当時、私と同じ体験をしてい

(注11) 配給

統制経済の下で、不足しがちな  
物資の流通を統制し、特定の機関  
を通じて一定量ずつ売ること。第  
二次大戦の戦中・戦後に行われま  
した。

た人が何人もいた。

また、弾薬については、矢代田の山中に木箱に入れられた物が多くあり、それらは、外から見ても、わからないようにされていたという。

新保小学校の子供達が、弾薬の木箱の上に木の枝を採って来て隠す作業をさせられたのだと、当時の記憶を話す人もいる。

また、小須戸小学校のグラウンドにも、一時弾薬の入った木箱が積んであったこともあったという。それらは、戦争が終わり、アメリカ兵が処理したとも聞いている。

もう、こんなことが自分達の身近にあったという事を語る人も少なくなってしまった。それだけ当時が遠くなり、それだけ平和な時代が続いている証であるのかもしれない。

しかし、忘れ去るには、あまりにも大勢の人々を取り戻すことのできない大きな代償<sup>だいしょう</sup>を払ってしまった感もいなめない気がしてならないのである。

長井さんは、第二次大戦中、学校で共に学んだ、学童疎開や縁故疎開をしていた生徒達のその後の状況を確認するため、7年という歳月をかけ、東京等に何度も足を運び、当時の人達に話を聞き、その体験談を1冊の本にまとめました。

「戦乱に翻弄された子供達」  
学童疎開の記録  
発行：平成22年5月20日

# 学童疎開の記録

旧 新潟県中蒲原郡小須戸町

# 戦乱に翻弄された 子供達



昭和20年2月25日 小須戸国民学校にて

東京から疎開してきていた白川国民学校6年生の卒業と中等学校受験のため、東京へ帰京する前に撮った記念写真。男子26名。女子21名。合計47名。



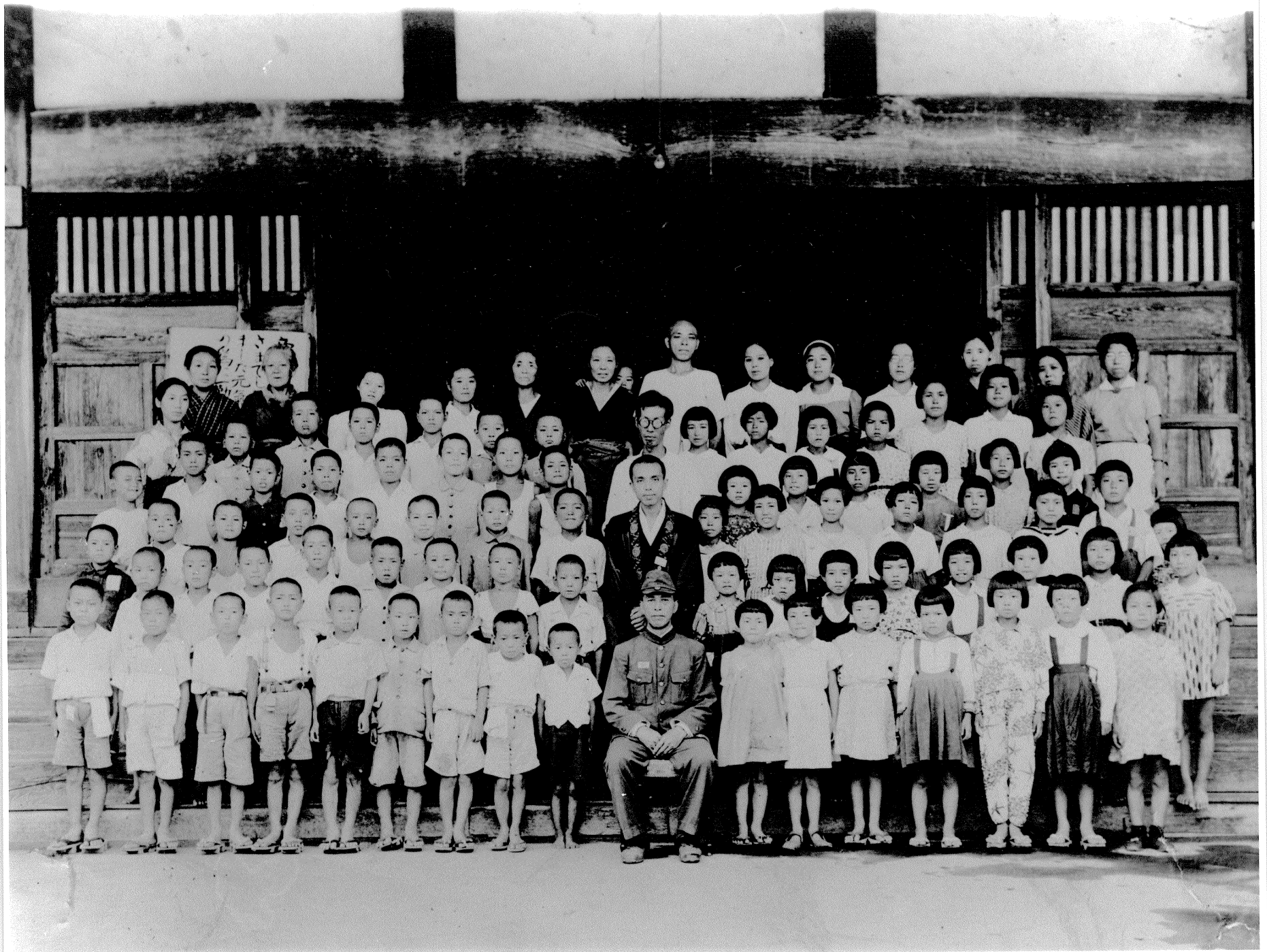
昭和20年3月10日 東京に戻った疎開児童達は東京大空襲に遭遇。

写真に写っている児童の中で、消息がわかった者だけで14名。その内、9名が犠牲になっていました。





東京都白河国民学校疎開児童 S19.8.~S20.8. 新潟県小須戸町 吉春にて



白河国民学校 疎開児童 昭和19年 小須戸 了専寺にて



東京都白河國民學校疎開兒童 S19.8.~S20.8. 新潟県小須戸町 中久にて



東京都白河国民学校疎開児童 S19.8.~S20.8. 新潟県小須戸町 了専寺にて



郷土勇士

Table listing names and locations under the '郷土勇士' (Local Hero) section, organized in columns.

われ等の防空陣に 手落はないか

大和一致あくまで決勝へ

九月の月報 徹底的に... 大和一致あくまで決勝へ



優良学徒工 員を表彰

優良学徒工員を表彰... 表彰状を授けられた

東頭未教育 兵合宿訓練

東頭未教育兵合宿訓練... 訓練の様子を写した

合同海軍葬儀

合同海軍葬儀... 葬儀の様子が写った

疎開児童第三陣

さのふ中東浦地区へ

疎開児童第三陣... さのふ中東浦地区へ... 児童の様子が写った

南瓜や豆などを 女子挺身隊慰問

女子挺身隊慰問... 南瓜や豆などを... 慰問の様子が写った

# 白河国民学校疎開児童転校先・関連先

